

スクールワールドに、チカはなる！

真西秋矢

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

千歌ちゃんが頑張るお話、第二弾です。

目次

スクールワルドルに、チカはなる！

スクールワルドルに、チカはなる！

旅館、十千万。そこにある自室で、アイドル雑誌を読む少女の姿があつた。

「ふむふむ……μ sのにこちゃんには小悪魔な一面もあつたんだ……」

キラキラな内容を読むその姿勢は、真剣そのもの。

「確かに、こんな可愛いのに小悪魔なセリフ言われたら、たまらないよね」

そうしてちよつとだけ妄想をし、

「よし、決めた！ 私も小悪魔を目指す！」

高海千歌は、拳を握り締めて宣言した。

「……で、小悪魔って何だろう？」

勢いだけは良かったものの、腕を下ろして首を傾げる。

「悪魔だから、悪いんだよね？ あ、でも“小”悪魔だから、そこまで悪くないって事なのか……。ちよいワルな感じ？ ちよいワル……ちよいワル……。うくん……」

至極どうでもいい事を、知恵熱を出して悩む千歌。

「おはヨーソロー！」

そこへ、敬礼をしながら曜が入って来る。

「あー千歌ちゃんまたアイドル雑誌読んでる。朝から読んでたら、また遅刻しちゃうよ」

「む……」

「……千歌ちゃん？」

脳内で試行錯誤を繰り返す千歌に、曜の声は聞こえない。

「入ってくる曜ちゃんを大声で驚かせる！」

「わっ……いきなりどうしたの？ てかそれ、本人の前で言っちゃおう？」

大声を上げた千歌に、曜は苦笑い。

「ん？」

そこで初めて、千歌は後ろを振り返る。

「……………。曜ちゃん!? いつからいたの!?」

「あ、気付いてなかったんだ……。ついさっきだよー。私を驚かすとかどうとか言ってた時」

「もおーいたなら言つてよく! いきなり失敗しちゃったじゃん!」  
「えつと……。何が?」

当然曜には、千歌が何を企んでいるのかなんて分からない。

「実は……かくかくしかじかで」  
「ふむふむ」

「……という事で、千歌はヤンキーを指しているのだ!」  
ドヤツ、と言いつつ放った千歌に、

「また変なものに影響されちゃったのか……」

曜は慣れたように小さく息を吐いた。

「バレちゃったからには、曜ちゃんにも協力してもらおう!」

「協力って……具体的に何をやるの?」

「そこなんだよねえ……。思い付きだから、これといって案があるわけでもなくて」

「あ、そこは自覚あるんだ……」

「むく……。学校に遅刻するとか!」

「いやそれ、先生に怒られるだけだし……。というか、現在進行形ですうなりそうなんだけど」

曜は壁の時計をチラ見する。あと五分以内に出ないと、バスが行ってしまう。

「あえて歌詞を書かない!」

「それは梨子ちゃんが怖いよ……」

千歌も状況を想像したのか、神妙に頷く。

「旅館の部屋を掃除しない!」

「それは後で、美渡さんに絞られるよ?」

「う、旅館の神様には、逆らえない……」

アホ毛がへニヤリ、これも断念。

「スイーツ食べまくってカロリー大量摂取!」

「ダイエットで泣いても知らないよ……」

「ダイヤさんのプリンを食べちゃう！」

「それは、絶対にやめた方がいいかな。うん」

「図書室の本を借りっぱなしにして放置！」

「図書委員の花丸ちゃんに迷惑かかるよ？」

「差し入れと称して、お菓子持って理事長室に邪魔しに行く！」

「鞠莉さんならむしろ、喜びそうだなあ……」

「果南ちゃん家のボンベを勝手に使っちゃおう！」

「普通に営業妨害だから、やめようね？ 昔持ち出そうとして、ボンベ

一本割ってこっぴどく怒られたよね？」

「ルビィちゃんにガ○ガリ君のシチュー味をプレゼント！」

「多分泣き出すよ？」

案を出す瞬間に却下され、

「もおー何していいか分かんない！」

千歌は頭を抱えた。

「あはは……」

そろそろ諦めるだろうと、曜も特に止めたりはしない。

「あとは……あとは……」

千歌はしばらく唸った後、

「善子ちゃんの配信に乱入する！ 新衣装持って！」

「いいね！ やろう！」

「へっ？」

まさかの賛同が返ってきて、千歌は変な声を上げる。

「えつと……曜ちゃん？」

「ちようど」着だけ仕上げた衣装があつたんだよね。みんなの感想

聞きたいし！ リトルデーモンさん達にも協力してもらおう！」

「そんなに乗り気になるとは……思わなかったなー？」

もはや戸惑う千歌。

「ほら千歌ちゃん！ 早くしないと学校遅刻しちゃうよ！」

「あ、うん」

曜に連れられるまま、部屋を飛び出す。

「あ、そうそう千歌ちゃん」

「ん？」

「千歌ちゃんはそのままで充分可愛いんだから、キャラ作りとか必要ないよ」

「そ、そうかな……」

「ちよつとおバカな方が、千歌ちゃんらしいもん」

「こらー！ おバカってどういう事だー！」

「あ、千歌ちゃんが怒った。逃げろ」

「待てー！」

後日、

「はあい、リトルデーモン達。会えて嬉し」お、やってるやってる「お邪魔します」い……は？」

「ねえねえ、新しい衣装作ってみたんだけど、どう思う？」

「可愛いよねえ。キラキラだよねえ」

「ふむふむ……ホントに!!？」

「良かったね曜ちゃん！ みんな可愛いって言ってるよ！」

「よーし、じゃあ次の衣装はこれでいこう！」

「けっけい！」

「早速、帰って衣装作り始めないと！」

「頑張ろー！」

「お邪魔しました」

「……………」

「何しに来たのよ！」